

民族国家語とロシア語¹

— グローカル化する中央アジアの言語状況 —

白山 利信

キーワード：国家語，ロシア語，中央アジア，グローカリゼーション，ルソフォニー

1. 目的

ソ連邦崩壊（1991）から20年以上が経過し，中央アジア諸国の言語状況が社会構造的に変化したことを踏まえ，中央アジアにおけるロシア語の国際性について，民族的階層性，グローカリゼーション，「ルソフォニー-russophonie（ロシア語圏）」²という視点から検討する。

図1 中央アジア諸国の位置



¹ 本稿は，2012年3月24日に神奈川大学横浜キャンパス（17号館215会議室）で開催された2011年度神奈川大学国際交流事業「シンポジウム・ユーラシアを研究する『日露の交流と言語教育～ロシア語の新たな国際性』」において，同題目で口頭発表したものを修正・加筆し，論考の形にしたものである。

² フランス語話者 francophone から成る言語共同体を意味する「フランコフォニー francophonie（フランス語圏）」をヒントに筆者が造語した用語で，ロシア語話者 russophone から構成される言語共同体を示している。

2. ロシア人を中心とする多民族共生社会の崩壊

ソ連邦崩壊後、旧ソ連地域の言語状況は大きく様変わりした。かつての 15 の旧構成共和国は独立国家となり、社会主義という理念を放棄した。各国は基幹民族を中心とする国民国家形成を目指し、民族主義的な国づくりを展開した。そのため、ソ連時代に「ソ連人」という理念のもとで形成された、ロシア人を中心とする多民族共生社会のバランスが大きく崩れ、民族間の序列・階層性は一変し、ソ連邦という社会的枠組みの中で実質的に多数派的地位を得ていたロシア人は（ロシアを除く）各新生国家において完全にマイノリティー化した。反対に国名を冠する民族（基幹民族）があらゆる領域において実質的な権限を握るマジョリティーとなった³。

表 1 中央アジア諸国の人口

	国名	人口			
		1990年	比率	2010年	比率
1	ウズベキスタン	2051.5万人	40.7%	2744.5万人 △	45.2%
2	カザフスタン	1653.0万人	32.8%	1602.6万人 ▼	26.4%
3	タジキスタン	530.3万人	10.5%	687.9万人 △	11.3%
4	キルギス	439.5万人	8.7%	533.4万人 △	8.8%
5	トルクメニスタン	366.8万人	7.3%	504.2万人 △	8.3%
	計	5,041.1万人	100%	6,072.6万人	100%

作成：白山利信（United Nations, Department of Economic and Social Affairs の公表資料等に基づく）

3. 国家民族主義に基づく言語政策の推進

ソ連邦の領土的遺産の大半を引き継いだロシア連邦はソヴィエト的な価値観を原則的に放棄し（脱ソヴィエト化）、「ロシア人」、「ロシア語」、「ロシア正教」といった三つのアイデンティティーを国民統合の旗印として民族主義的傾向を強めていったが、その中で中央アジア諸国では、程度の差こそあれ、「ロシア離れ」、「ロシア語離れ」という脱ロシア化が顕著となった。ソヴィエト的な価値観の否定は不可逆的な時代潮流であったが、脱ソヴィエト化の象徴となったのが「ロシア離れ」、「ロシア語離れ」である⁴。特に政治的、経済

³ 中央アジアの人口は、1990年から2010年までの20年間で1000万人以上増加している。その増加の中心は基幹民族である。そのために、ロシア人を含めた少数民族の割合は少なくなっている。人口増加という点では、ウズベキスタンの増加が著しく、700万人以上に上り、ウズベキスタンは中央アジア全体における人口比の45%を占めている（表1を参照）。
⁴ ウズベク語やトルクメン語では文字表記がキリル文字からラテン文字に切り替えられたが、これはロシア語離れを示す好例である。中央アジア諸国では、ロシア人比率が相対的に高いカザフスタンとキルギスでロシア語が公用語として法的に規定されており（表2, 3を参照）、ロシア語の社会的影響力は維持されている。それでもソ連時代ほどの言語的権威はなく、基幹民族語である国家語使用の比重が年々顕著に高まっている。

的、外交的独立性を確かなものにするためにいち早く実施されたのが基幹民族語の国家語化である。国の公の言語を法的に明確に規定した結果、国家語となった基幹民族語の社会的機能域が大幅に拡大し、社会における国家語使用の実質化が着実に浸透した⁵。他方、ロシア語の社会的地位は大きく低下し、第二言語化が急速に進んだ⁶。

表2 中央アジア諸国のロシア人の比率を中心とした民族構成（2006）

	国名	ロシア人の比率	基幹民族の比率	その他の民族の比率
1	カザフスタン	30.0%	53.4%	16.6%
2	キルギス	12.5%	64.9%	22.6%
3	ウズベキスタン	5.5%	80.0%	14.5%
4	トルクメニスタン	4.0%	85.0%	11.0%
5	タジキスタン	1.1%	79.9%	19.0%

作成：白山利信（世界銀行公表資料等に基づく）

表3 中央アジアにおける法的地位を有する言語

	国名	国家語	公用語
1	カザフスタン	カザフ語	ロシア語
2	キルギス	キルギス語	ロシア語
3	ウズベキスタン	ウズベク語	-
4	タジキスタン	タジク語	-
5	トルクメニスタン	トルクメン語	-

作成：白山利信

4. 民族・言語・宗教の三位一体的価値観の急速な普及

民族的階層性と言語的階層性の転換は、思想的な基盤も根本的に変えた。中央アジア社会においては共産主義や社会主義といったロシア・ソヴィエト的価値観が衰退し、消失の様相を示していく一方、ソ連時代に抑圧されていた、中央アジアの思想的伝統であるイスラム教（スンニー派）が復権し、人々の精神的支柱としてすでに実生活の中に深く根を張り、機能し始めている⁷（表4を参照）。中央アジア各国では、「基幹民族」、「国家語」、「イ

⁵ 基幹民族中心の民族主義的な国づくりが国策となった。その結果、ロシア語のできない若い世代が増加し、基幹民族のバイリンガル度の低下やモノリンガル化傾向が観察されるようになった（言語使用のローカル化）。さらに興味深いのは、ソ連時代はロシア語が民族間交流語の役割を果たしていたが、国家語となった基幹民族語がロシア語とともに民族間交流語になりつつあることである（社会的言語機能のローカル化）。

⁶ 基幹民族・基幹民族語の地位の向上とロシア人・ロシア語の地位の低下は、ロシア系住民を含むマイノリティー民族のロシア連邦、欧米等への移住を促し、現在もその人口流出が続いている（人口移動のグローバル化）。

⁷ ソヴィエト時代とは質的に異なる民族主義的イスラム世界の形成が進んでいる（社会の

スラム教」が国民統合の象徴としてすでに重要な社会的役割を担っている⁸。

表4 中央アジアの思想的基盤の中心

	国名	旧ソ連時代思想的基盤の中心	現在の思想的基盤の中心
1	カザフスタン	社会主義	イスラム教（スンニー派）
2	ウズベキスタン	社会主義	イスラム教（スンニー派）
3	キルギス	社会主義	イスラム教（スンニー派）
4	タジキスタン	社会主義	イスラム教（スンニー派）
5	トルクメニスタン	社会主義	イスラム教（スンニー派）

作成：白山利信

5. 新たな社会的同化圧力の形成

中央アジアのマイノリティー化したロシア人や少数派民族の社会的地位は総じて低くなり、基幹民族側からの社会心理的圧力が形成される過程で、ロシア系住民たちは「基幹民族」の「国家語」を習得して社会的同化を受入れるか⁹、同化圧力を拒否して国内の抑圧的現状をそのまま甘受するか、あるいはロシア連邦やその他のルーツ民族国家などへの移住を目指すか、といった厳しい選択を迫られている。特に将来への明るい展望を見出せない

ロシア系住民の若者たちの苦悩は非常に深い。今もロシア系住民の人口流出は続いている¹⁰。

6. グローカルパラダイムシフトと「ルソフォニー（ロシア語圏）」

ローカル化)。

⁸ ロシアの国家アイデンティティ形成の構造と非常に類似している。

⁹ 新しい社会現象としてロシア系住民を含むマイノリティー民族の一部が社会的同化を選択し、定住化、バイリンガル化する例も見られるようになった。さらに、社会的同化が進めば、基幹民族との族際間結婚による民族的同化、さらには文化的同化も進行するものと思われる（マイノリティー民族のローカル化）。

¹⁰ 筆者がウズベキスタン、キルギス及びタジキスタンでロシア系住民に対して実施した聴き取り調査（平成21年度-5名（タシケント）、平成22年度-7名（タシケント）、7人（ビシュケク）、2名（ドシャンベ）、平成23年度-3名（ビシュケク））によると、中央アジアのロシア系住民の若者の一部は、ロシア国内の大学に進学し、卒業後にロシアで就職し、経済的な基盤が整った後に、両親を呼び寄せるといったケースもある。一方、永住覚悟で出国したロシア系住民の中には、新天地であるロシア（特に地方の農村）での生活に適応できず、再び中央アジアに戻る者も少数存在する。適応不良の原因は多様であるが、移住先で地元民による差別などのハラスメントや思うような就職できないことによる経済的理由も相対的に多いようである。ハラスメントのひどいケースでは移民した中央アジア出身のロシア系住民の住居に放火し、全焼させるといった深刻な事例もある。かなり高齢者のロシア系住民は、自身の子どもたちや親戚などがロシアなどに移住し、呼び寄せの誘いを受けても、自分は住み慣れた中央アジアを離れたくないという理由で留まる傾向もあるようだ。

図 2 グローカル化する言語状況
(ウズベキスタンの例)

ソ連時代(東西冷戦)		ポスト・ソヴィエト時代(ボータレス)	
ローカルな秩序 (ソ連邦/東側内部世界)	ロシア語	上位のローカルな秩序 (ウズベキスタン)	国家語としてのウズベク語 (ローカル言語)
	ウズベク語	グローバルな秩序 (世界の中のウズベキスタン)	ロシア語 (ローカル言語)
準グローバルな秩序 (米国/西側外部世界)	国内のマイノリティー言語 東側内部世界の諸言語	下位のローカルな秩序 (ウズベキスタン)	英語 (グローバル言語)
	英語		中国語・トルコ語・アラビア語 (ローカル言語)
	仏語・独語	タジク語 (ローカル言語)	
その他の外部世界の秩序	西語等	その他の内部・外部世界の秩序	国内のマイノリティー言語 (ローカル言語)
	上記以外の言語		上記以外の言語 (ローカル言語)

現在、中央アジア諸国は、閉じたソヴィエト的ローカルパラダイムから開かれたグローバルパラダイム、つまり、ローカルな秩序とグローバルな秩序の共存状態へと移行し、脱ソヴィエト化、脱ロシア化現象の中で一時的に冷遇されたロシア語は、現在、ロシア連邦との経済的・政治的・外交的・文化的・学術的關係の実用的価値が再認識され、再びかつての輝きを取り戻し始めている¹¹。こうしたロシア語の再評価と併せて、社会のローカルな秩序への積極的な関与(表5を参照)という視点から①国家語(基幹民族語)、②ロシア語¹²、③英語¹³の3言語中心の言語教育を志向する新しい言語教育観、すなわち、言語教育におけるグローバルパラダイムシフトの流れが確実に形成されている¹⁴(図2を参照)。

表 5 グローカル化する社会状況

社会構造の変化	社会変化による結果	グローバル化/ローカル化
基幹民族中心の民族主義的な国づくりと脱ロシア化・脱ソヴィエト化	ソヴィエト時代とは異なる民族主義的イスラム世界の形成	社会のローカル化
基幹民族・基幹民族語の地位の向上	ロシア系住民を含むマイノリティー民族の定住化・バイリンガル化	マイノリティー民族のローカル化

¹¹ 政治、経済、軍事、外交分野等でのロシアとの新しい隣国関係づくりと同時に、欧米諸国、中国、インド、トルコ、アラブ首長国連邦などのロシア以外の国々との関係強化も進み、自由で自立的な新しい対外関係の確立が志向されている(対外関係のグローバル化)。

¹² ロシア語は歴史的・地政学的利点を活かしつつ、経済活動のための言語、学問・教育の言語、国内及び旧ソ連地域の民族間交流語としての需要が近年ますます高まっている(言語に関するローカルな秩序の継続)。

¹³ グローバルな秩序との必然的な関わりから、国際交流語としての英語の需要が急速に高まった(人的交流、組織間交流、国家間交流のグローバル化)。

¹⁴ ここで示されたグローバル化する中央アジアの言語状況の構図は各国によって異なる。但し、中央アジア諸国において、①国家語、②ロシア語、③英語という序列を示す階層性が生じていることは間違いない。カザフスタンのようにグローバルな秩序を明確に志向する国とトルクメニスタンのようにローカルな秩序を重視する国とでは、グローバル化の様相に顕著な違いが存在する。

	国家語・公用語としての基幹民族語の民族間交流語化	社会的言語機能のローカル化
ロシア人・ロシア語の地位の低下	ロシア系住民を含むマイノリティー民族のロシア連邦、欧米等への移住	人口移動のグローバル化
	基幹民族のバイリンガル度の低下・モノリンガル化	言語使用のローカル化
政治・経済・軍事・外交分野等でのロシア以外の国々との関係強化	自由で自立的な新しい対外関係の確立	対外関係のグローバル化
	国際交流語としての英語需要の高まり	人的交流、組織間交流、国家間交流のグローバル化
政治・経済・軍事・外交分野等でのロシアとの緊密な関係の継続・再構築	ロシア語の再評価：経済活動のための言語、学問・教育の言語、国内及び旧ソ連地域の民族間交流語としてのロシア語需要の維持	言語使用のローカル化

作成：白山利信

7. 結語

中央アジアでは、ロシア系住民の比率が年々低下し続けているものの、ソヴィエト時代に初等・中等・高等教育を受けた40代以上の世代のロシア語運用能力は健在であり、「ルソフォニー（ロシア語圏）」が依然として維持されている。しかしながら、ソ連時代の教育経験が短くほとんどない、あるいはまったくない30歳未満の若い世代のロシア語運用能力の相対的低下は顕著で、基幹民族語とロシア語の良質なバイリンガル人口の比率が確実に下がっている。そして、歯止めのかからないロシア系住民の人口流出により、残されたロシア系住民の社会における民族的孤立化、ディアスポラ化が進んでいる。その結果、ソ連時代のような活力ある言語生活空間の「ルソフォニー」はすでにかつてのような形では存在せず、弱化・縮小の一途を辿っている。ロシア連邦との社会的・経済的な結びつき次第では、今後半世紀のうちに良質なバイリンガル空間としての「ルソフォニー」が消失する可能性すら否定できない¹⁵。とはいえ、中央アジアにおけるロシア語の社会的重要性は非常に大きく簡単に揺らぐものではない。中央アジアはもとより、独立国家共同体（CIS）全体における「ルソフォニー」の存在価値は、経済的、政治的、外交的、文化・学術的、地理的にも自明である¹⁶。まさに「ルソフォニー」の存在そのものがロシア語の国際性で

¹⁵ 将来、ディアスポラとしてのロシア系住民の母語話者集団によるロシア語空間は保たれる可能性があるかもしれないが、中央アジアの社会全体の中で機能する「ルソフォニー」としてのロシア語空間が消失する恐れがないとは言い切れない。恐らくソ連時代のように現地語とロシア語の豊かなバイリンガル空間を維持することは困難であろう。しかし、フィンランドにおけるスウェーデン語、バルト諸国におけるドイツ語と同様、中央アジアにおけるロシア語も、社会と民族の深奥に主従関係の中で刻まれた歴史的・文化的記憶として、今後幾世紀にもわたって一定の影響力を持ち続けること（大阪大学のA.ディボフスキー教授のご指摘による）は疑いないように思われる。

¹⁶ 他方、政治的に完全に離脱したバルト三国（EUに加盟）とグルジア（南オセチアとアブハジアの国家承認を巡りロシアと軍事衝突）の「ルソフォニー」の弱化・衰退の速度は著しい。但し、中長期的には政権交代等の政治状況の変化や社会・経済関係の好転などに

あり、国際コミュニケーション語としての可能性なのである。故に、「ルソフオニーの共通言語としてのロシア語」という発想に立った言語教育が今後必要であり、それを踏まえた言語教育政策が求められている。

翻って日本にとってのロシア語とはどのような意味を持つのであろうか。それは、ロシアを中心とする旧ソ連邦のエリアである広大なユーラシアという地政学的空間で機能している国際的ローカルコミュニケーション言語¹⁷、つまり、ルソフオニーの共通語としての有用性である。東アジアに位置する日本はこのユーラシア地域に連なっている。中国語や韓国語と同様、近隣語としてのロシア語、さらにはヨーロッパ東端にまで連なるルソフオニーの共通語としての意義を十分認識して、それを外国語教育の中でしっかりと位置づける必要がある。

確かに英語は少なくとも 20 世紀末及び 21 世紀初頭の国際語として地球規模で普及・定着した国際コミュニケーション言語である。しかしながら、言うまでもなく英語は地球の隅々にまで適用できるユニバーサルな言語ではない¹⁸。この地上には英語だけでは決して対応できない多様な世界が無数に広がっている。その多様な現実世界に踏み込み、日本と非英語圏世界とを繋ぐコミュニケーション手段となるのが他ならぬ個々のローカル言語である。その意味で、ロシア語は、英語だけでは通用しない広大なユーラシア地域（主に旧ソ連諸国）のコミュニケーション言語として機能するきわめて有力な国際的ローカル言語なのである。

【付記】

本研究は、平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）, 課題番号：21520427）「ソ連崩壊後の中央アジア諸国における言語動態に関する調査研究」の研究成果の一部である。

より、ロシアとの関係改善が進んだ場合には、一定のロシア語回帰現象が生じる可能性は十分にある。反対に国家語であるベラルーシ語の母語話者が相対的に少ないベラルーシでは、ロシア語母語話者が国民の大半を占め、さらにロシア語が第二国家語（公用語）としての確たる法的地位を有している。したがって、ベラルーシの「ルソフオニー」はソ連時代同様、現在も強固に維持されており、今後も長期的に維持されるであろう。しかし、将来、ベラルーシ語の国家語としての実質化を目指す言語政策が採択され、強力に推進されるような社会的・政治的状況が生まれれば、ベラルーシでも「ルソフオニー」の基盤が揺らぐことになるだろう。

¹⁷ ロシア語の国際性はグローバルなものではなく、ユーラシア地域の旧ソ連に限定されたローカルなものである。故に、ロシア語は、中国語、アラビア語、スペイン語、フランス語、ドイツ語と同様、世界の有力なローカル・エリア言語である。

¹⁸ 著名な英語教育学者である上智大学外国語学部の吉田研作教授より、「英語は国際語 international language ではあるが、ユニバーサルな言語 universal language ではない。このことは、外国語教育の専門家の盲点になっている。」とのご教示を頂いたが、全く同感である。

参考文献

1. USUYAMA, Toshinobu: Social and Linguistic Research into the Situation in Kyrgyzstan's Bishkek, Karakol and Osh Cities, *Tsukuba Working Papers in Linguistics*, Special Issue Dedicated to Professor Hakutarô Joô, pp.21-44, Linguistic Citcle, The University of Tsukuba, 2009.
2. УСУЯМА, Тосинобу: Постсоветская динамика языковой ситуации на территории стран Центральной Азии, *Мир русского слова и русское слово в мире*, XI Конгресс Международной ассоциации преподавателей русского языка и литературы, Том 3, Heron Press, Sofia, pp.234-239, 2007.
3. *Новая Российская энциклопедия*: В 12 т. Т. 1. М., Издательство «Энциклопедия», 2003.
4. 白山利信: 「タジキスタン共和国ドシャンベ市における社会言語学的調査の実施報告——若者たちの言語意識を中心として——」『第7回 文明のクロスロード——ことば・文化・社会の諸相——』, 日本学学際シンポジウム報告書 (2009年12月9日・10日, アルマティ, カザフスタン共和国カザフ国立大学), 西村よしみ・Balakaeva Lyaila 監修, 筑波大学中央アジア国際連携センター, 41-53頁, 2010.
5. 白山利信: 「旧ソ連地域における社会環境の変化とロシア語事情——ウズベキスタン共和国, キルギス共和国を中心として——」『スラヴィアーナ』 Vol.20, 東京外国語大学スラブ系言語・文化研究会, 194-222頁, 2005.
6. 『世界のロシア語 2003』中澤英彦・白山利信訳編, ロシア連邦外務省報告書, 下巻, 東京外国語大学語学研究所・筑波大学外国語センター, i-iv頁, 1-248頁, 2007.
7. 『世界のロシア語 2003』中澤英彦・白山利信訳編, ロシア連邦外務省報告書, 上巻, 東京外国語大学語学研究所・筑波大学外国語センター, i-iv頁, 1-186頁, 2006.

民族国家語とロシア語

—グローバル化する中央アジアの言語状況—

白山 利信

ソ連邦解体後 20 年以上経過し、中央アジア諸国の言語状況は、閉じたソヴィエト的ローカルパラダイムから開かれたグローバルパラダイム、すなわち、ローカルな秩序とグローバルな秩序の共存状態へと移行した。そのグローバル化した言語状況を反映し、①国家語（基幹民族語）、②ロシア語、③英語の 3 言語を中心とする新たな言語志向傾向が急速に広がりつつある。